

# 十一年目の痛感



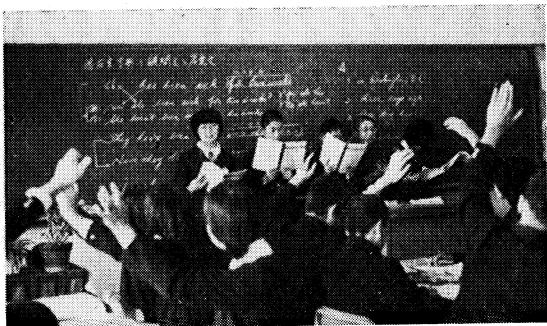
東条正記

「きょうの英語の授業はおもしろかった…」ある日の班ノートの一  
行であ

いた。間の中で非常に少ないことに気がつく。

る。それはちょうど自分の授業を改善してみようと思いつた、十分な教材研究をして、実践した日であった。

に、その生徒は、私の授業をそのように評価したのである。それを見た時に、私はほんの一握りの嬉しさを感じるとともに、次時への意欲が湧いてきた。以前、自分の授業を反省してみた



# やる気のある授業

それは、今までになかった生徒の姿であった。また、班対抗の形を取つてやると、負けじとばかり班で声を大きくし、音読練習や対話の練習をしたり、英文での問い合わせを数多く作ろうと準備に取りかかつたりした。そのような活動の中に、学習につまずきのある生徒が、自然と生徒同志によつて教えられたりしている光景が見られた。その一つに、ほとんど英文の読めない生徒が、英文にカタカナで読みがなをつけ、たどたどしくも全体の前で読んだのであった。その姿は、今までの間違いに対する不安のベールを脱いだ生徒の本当の姿であった。

それらの生徒の姿は、自分の指導への痛烈な批判であるよう気がした。

その日の授業は、予定の指導内容の半分にも満たなかつたが、今後の授業改善への明るい材料を見つけた点では、意義があつたようだ。

今まで、数多くの授業研究をしてきたが、それはいつも教師側に立つての研究であつたようだ。それで、つまり「いかに上手に教えるか」ということばかりにとらわれ、そこには教師と教材しか存在していなかつたのではなかろうか、そのためには生徒たちには、私の教え込もうとする意欲に負けただただオウムのように英文を読んだり、聞いたり、書いたりしてきたよな気がする。そのためには生徒たちは自ら、能動的に活動することをやめ、知識は求めるものでなく、与えられるものと思うようになつてきたのではないかろうか。

私は、生徒たちが次になにを求めているかということと、教師側が次になにを教えるかということとの間に大きなギャップが存在しているよう思う。今更ながら、新任当時の研修会で教えられた、「教科書」ではなく「教科書」で教えるという言葉の意味の深さを痛感せざるを得ない。今の私にとつて、そのギャップをなくすための方法はわからない。しかし、自分の指導法に安住することなく、絶えずそれを求めて行かねばならないと思う。昨今であ